

### 2.3. Monte Rosa 山塊第三峰 Signalkuppe 4554m (イタリア側からの 2000. 8. 27-31)

七月の最終日私は Walliser Alpen の Castor (4226m) 頂上にいた。Lyskamm を経て Monte Rosa 山塊に連なる縦走ルートはその頂きから東へ延びていた。快晴で全てが視界に入った。二日後にはこの道を行くのだと期待と不安で先を見ていた。しかし、その日の午後ガイド協会に戻って「天候は下り坂、縦走は見合わせろ」と言われて Dufourspitze への日帰り山行に計画変更したのだ。縦走を楽しみにしていた割に簡単に妥協したのには根拠があった。一ヶ月後に南のイタリア側から Signalkuppe まで登るオーストリア山岳会の山行計画に参加予定であったこと、そして行程半ばの Castor 迄は登っている事であった。その南からの Monte Rosa が今夏二度目の 4000m 登山である。

「どうしてそんなに危険な山へ行くの」と気遣ってくれる知人や家内の心配をよそに、八月末の土曜日早朝、参加仲間の車で出発。約 1000km を走ってイタリアの Aosta という村に着いた。ここに今回高地順応のために登る Gran Paradiso (4061m)<sup>1</sup>への登山基地がある。ここはイタリア側からの Mont Blanc 登山基地でもある。その日はツェルトでの仮泊<sup>2</sup>。

翌八月二十七日、快晴。登山の出発点は標高 1950m のキャンプ地 Pont。ここから 2700m の Chabod 小屋に移動して明日の登頂に備える。氷河の登路を見上げてイメージ登攀をしている時に奇遇があった。前に居る人の背中に「Zermatt」の文字がある。「そう言えば一ヶ月前 Zermatt に居たなあ。」とぼんやりしていたら、その人が振り返った。視線が合って、同時に「Y o u !」と指差して言葉にならない言葉。何と、一ヶ月前 Breithorn に登った時のガイドだ。再会を楽しみ、写真を撮る。客を連れてスイス側から Monte Rosa を越えて来たらしい。明日はやはり Gran Paradiso に登り、その足で Mont Blanc まで縦走予定だという。

八月二十八日、快晴。「四時半起床」と前夜にガイドから指示があったが、三時には目覚める。外の星空を眺めたり、体操したり、トイレ・洗顔で時をつぶす。四時十五分、「もういいか」と荷造りにゴソゴソ始めたら「Toshio, what are you doing, one hour earlier?」とガイドに怒られる。五時半出発。こちらの山行はとにかく休まない。一本二時間は普通だ。今日もなかなか休ませてくれない。きつい<sup>3</sup>。晴れているのが救いだ。九時、山の陰から陽射しに出る。急に暑さを感じ、雪面は軟らかくなる。3800m 地点で荷を置き、あとは空身で頂上に向かう。十一時頃、おっかなびっくりで最後の岩場約 20m の登攀を終えて、頂上到達。今夏四座目の 4000m 峰だ。マリア像。360 度。一ヶ月前 Breithorn から眼にした Gran Paradiso の頂に今居るのだと感慨。その Gran Paradiso 頂上から今日は逆に Monte Rosa 山塊全景が見える。Dufourspitze も見える。風はなく、暖かい。狭い頂上に十人余りがひしめくように座を占めて、眺望



を楽しむ。この瞬間が山に登る楽しさを与えてくれるのだ。写真。下山は早い。一時間で氷河を下り、あとは岩道をひたすら歩いてキャンプ場へ四時半帰着。疲れを取り

<sup>1</sup> GranParadiso はイタリア領内の最高峰とももの本に書いてある。地図上では、MonBlanc, MonteRosa とこの GranParadiso が逆三角形の頂点をなす位置関係にある。

<sup>2</sup> これも初体験で面白かったが、本題からずれるので詳述はしない。売店やトイレ・シャワー等の共用設備が整い、低料金で誰もが利用できるようになっている。私のツェルト自体も、山岳協会からのレンタルで一日僅か 10 シリングである。キャンプ場も各自の良識で清潔に維持されている。

<sup>3</sup> 国連ハイキングクラブの山行よりペースは早く、休みの少ないのが目立つ。

たいと今夜は近くのホテルに泊まることにする。連れの一人が同宿を誘ってくれた<sup>4</sup>。

翌日は移動日でゆっくり。東へ 40km ほど車で移動し、登山ケーブルで 2900m まで上がってから Gnifetti 小屋まで歩く。この小屋の標高は 3650m。途中の氷河上で霧に包まれガイドも道を失いかかる。一、二度行きつ戻りつして小屋に着いた時は午後八時をまわっていた。翌朝の予定を確認して六人用の鳩小屋<sup>5</sup>に入る。

八月三十日。丁度一ヶ月前に初の 4000m だったなと思いながら四時半起床。用足し、朝食後五時半出発。薄い霧。今回の最終目標 Signalkuppe (イタリア名 Punta Gnifetti, 4554m) に向かう。今日の標高差は 900m。Dufourspitze の時の 1900m の半分だ。がなぜか今朝はスタート時から喉が渇き口呼吸になっている。緊張の所為か、高度の所為か。七時過ぎ、4000m に達して手元の高度計の測定範囲を越える<sup>6</sup>。八時、鞍部に着いて小休止。雲の多い中で、Matterhorn も Lyskamm も白黒写真のように見える(→)。Monte Rosa も見えるが、月初めとは裏側から見る格好なので形が異なっている。あのピークが Dufourspitze かと眺めていると、「先ず手前の Parrotspitze に登る。Eispickel とアイゼンはこう使って」とガイドが即席の指導。他の連中は知らず、私は絵で見ただけで Eispickel の使用経験はない。見様見真似で傾斜 35 度の斜面をよじ登る。実感は 45 度を越えている。ものの十回もピッケルを振ると手が疲れてくる。斜面は気が遠くなるほど上へ続いている。



うんざりするほど登って<sup>7</sup>尾根に出る。今度は狭い痩せ尾根の雪道。10 分も歩いたか、九時少し前、頂上に着く。Parrotspitze (4436m)。疲れた。休みたい。がザイルを先導するガイドの足は止まらない。引きずられるように歩く。どうなることかと思ったら少し先の平らな部分で漸く止まってくれた。ほっ！。カメラを取り出す余裕もなく、つかの間の休憩で疲れを必死に癒そうとする。こんなに辛い思いでなぜ山に来るのか、ましてこんな天候で、と自問する。この先、ここから降りてまた登ってあのピークまで行くのかと、一種の恐怖感でぼんやり Signalkuppe を見つめる。

斜面を降りる。アイゼンの爪 12 本を雪面に突き刺すように蹴り込んで足場を確保しながら降りる。転んでもこの雪面なら死にはしないだろうと思う一方で、50m 位の滑落かな、ザイル仲間と一緒に怪我は免れないだろうな、などと考える。

最低部に着いていよいよ最終目標の Signalkuppe に向け登り返す。疲れが激しくなる。雪が強まり視界も次第に利かなくなる。足が重い。脛脛が攣りそうだ。立ち止まりたい。休みたい。ザイルにつながれているのが恨めしくなる。前位置の若い娘 (21) も、後位置の老人 (61) も元気で音をあげる気配はない。最下位者だけは御免願いたいと必死に頑張るが歩幅が稼げない。ザイルに引っ張られながら転ばないのが精一杯である。勿論、周囲の展望を楽しむ余裕はない。もっとも、周囲は吹雪で楽しむ眺望はないけれど。

<sup>4</sup> Twin Bed と思ったら Double Bed だったのは意外だった。こちら流の自然体かと納得したが、正直落ち着かなかった。「早起き厳禁」と前日ガイドに言われていただけに。

<sup>5</sup> 余談だが、男女相部屋は普通。寝台列車でもカーテンなしの相部屋だ。皆淡々としている。

<sup>6</sup> この高度計を買った二年前に目指した Grossglockner にはこれで十分だった。今夏初めてその測定限界に気付いてがっかりしている。折角の超 4000m の記録が取れないのだから。

<sup>7</sup> 後で聞くと高度差わずか 50m 程度だったらしい。

十時頃。道は延々と続く。「この傾斜を登り切って、少し緩やかになるあの辺りで休んでくれるかな」との期待は二度も三度も裏切られて歩き続ける。歩幅はさらに小さくなる。目測では目標の小屋までの道半ば。視界が悪い所為もあってすごく遠くに見える。気が萎える。あそこまでは持たないと弱気になったら辛抱も限界に来た。ついに観念して“*Ich bin kaputt. Pause, bitte!*”と敗北宣言。しばしの臨時休みを要求して雪面に倒れる。深呼吸。五分も休んだか、「あと30分だ」とガイドに叱咤激励されて再度吹雪の中をぼとぼと歩き出す。やっぱり辛い。が、仕様がなくて諦めて祈るように一步一步前進する。

十時半、疲労困憊状態で小屋に着く。この一ヶ月で六座目の4000m峰だ。目標だったその最後の4554mだが、今は感激するよりただ眠りたい。空腹よりも渴きよりも眠りたい。食堂の長椅子に倒れるように横になる。ガイドの指示が鬼の声のように耳に突き刺さる。「30分休んだら出発。Toshioはスープと紅茶を飲んでおけ。」たった30分だけ？しばらく寝かせてくれないかな？この小屋ではTシャツも買いたいし<sup>8</sup>、できるものなら電話もしたい。しかし、そんな余裕は貰えなかった。連れの一人に頼んでTシャツを聞いて貰ったのが精一杯。ところが「ない」との返事。これも精神的に辛かった。楽しみにしていただけに。

十一時、疲れも取れないまま悲壮な思いで下山開始。吹雪の中を降りる。風の寒さより、顔をたたく雪よりも足の重さが辛い<sup>9</sup>。転ばないでザイルに着いていくのがようやとだ。ガイドは加減してくれているのだろうがとにかく休まない。意識が朦朧としそうな中で、小説だか、映画のシーンだか、雪原を這うように生を求めて必死に歩く男の姿を思い出す。自分がそれに重なって見える。あれは梶と言ったかな、あるいは「ひまわり」のマルセロ・マストロヤンニでもいいか。何れにしろ、今の自分には彼らほど生への強い復帰欲がないのではないか。ザイルから離れてこの雪の上で横になったら楽だろうな、そうしたらそのまま死ぬのだろうか。

ただただ物体のような気持ちでザイルにしがみついて視界の開けない吹雪の中を歩く。寒さは感じない<sup>10</sup>。つまづきながら時に小さなクレバスを越え、いつまでこんなのかと考えることもなくなってぼんやりと着いていく。どの位そんな状態で歩いたのか。自分が疲れて歩いているとすら意識しなくなってしばらく、吹雪の中に構築物らしいものがうっすら浮かんできた。今まで何度か幻想に騙されていたからあまり期待せずに居ると「さあ着いたぞ。ザイルをはずして個々に小屋へ戻れ。」とガイド。時計は午後一時を指していた。アイゼン他荷をはずすともう余裕は残っていなかった。「紅茶でも飲もう」と連れが誘ってくれたが、その元気もなくベッドに倒れ込んだ。

4000m 峰への欲はもうなかった。目標にした Signalkuppe には行ったし、翌日は終日小屋で休むことに決心して夕方のグループ会合に出た。ガイドから幾つかのプランが出たが、結局天候不順を考え全員



翌日下山に決まった。私としては歓迎の結論だ。が、疲れが一晩で取れるか、別の心配が心をよぎる。

翌朝目覚めると外は雪。足は何とか歩けそう。八時下山開始。途中の岩場の降りは緊張もの。疲れた足は時にバランスを失いそうになる。必死に頑張る。昨日の雪中と違い今日は死にたくない気持ちが強い。生への執着を感じる。やりたいことも残っている、会いたい人もいる。この方がまともかと考える。昨日か

<sup>8</sup> Zermatt 情報では MonteRosa 名入りの Tシャツがこの小屋で手に入る筈だった。

<sup>9</sup> アイゼン付きの山靴は重量約 5kg。疲れるとタイヤのように重く感じる。

<sup>10</sup> 本当に寒くなかったのか、寒ささへ感じなくなっていたのか、書いている今分らない。

らの新雪で、登りで必要だったアイゼンを下りでは必要としなかった。約一時間で危険な場所を終わる。3200m。

十一時、登山ケーブル山駅。2900m。乗り継いで下界には正午前に着く。皆で軽い昼食をして現地解散。私は地元のホテルで一泊することにする。三日ぶりのシャワーで生き返る。昼寝。外は小雨。夕食は同宿の四人で近くのレストランへ。ワインが旨い。

翌日は九月一日。先ずは快晴。朝食前の散歩で朝日の射す山並みを見上げる。あれは Lyskamm か。宿に戻って自分自身へのカードに書いた。『今夏の恋人訪ね歩きは昨日の Signalkuppe (4554m) で終わった。恋人と一緒に過ごすのは楽しいし、少し間があくとすぐ会いたくなるけれど昨日の恋人は厳しかった。少々度を過ぎた付き合いを求めたのかも知れない。朦朧としそうな意識の中で、雪の中の激しい疲れで、「ひまわり」のマルセロ・マストロヤンニに自分が重なって見えた。恋人と心中してはいけない。相手の恋人だって迷惑だ。日頃の堅実な生活があって、時に恋人と会うのが良いのであって高望みしてはいけない、歳相応の恋の仕方がある筈。程々であれば恋人も許してくれるだろうと思う。下山して、今日の見違えるような快晴の山並みを見て、生きてまた恋人に会える素晴らしさに喜んでいる。』

今回の山行は正直疲れた。不安があったのは確かだ。だから、申し込む前に内容聞いてからと六月末の打ち合わせに行っただ。不安での質問に、ガイドや他の参加者から激励されて、誘われて参加決意をしたのだった。私より年配の人も居たし、同年代の女性も居てこれなら行けるかと思ったが生易しくはなかった。後悔はしていないが、いい勉強になった。

